

児童の生活構造の時代的変遷に関する研究(第4報)-その1-人的要因からみた子どもととりまく生活環境

大妻女大家政 ○ 今井節子・平井信義 鈴木真一 仙波千代 干羽喜代子 前川當子 馬場吉三

石井とみ子 ハ倉巻和子 大竹智徳子 石橋お久 大石利子 関真知子

目的 変動する社会の中で、児童の生活構造がどのように変化しているのかを知る目的で、昭和46年から過密・過疎の両地域における児童の実態を調査し、両地域の相違点・過疎地の社会的状況・調査手法上の問題点などを、第24・25・26回の本学会において発表してきたが、今回は、これまでの調査から問題点として明らかになった、居住地域(中心部・周辺部)および養育者(母親と祖母)の要因から、子どもの生活に差異が生ずるのではないかと推察し検討を試みた。

調査方法 対象地は秋田県北部の上小阿仁村・南部の皆瀬村であり、両村とも過疎地である。同時に、対照地として、秋田県の純農村の典型的地域である中部の神岡町を選び、これら3ヵ町村の5・6才児で第1子の子どもを母に質問紙を配布し、さらに面接を実施した。

結果 ①家族については、核家族が上小阿仁村では22名中9名、皆瀬村は16名中3名、神岡町は45名中9名であり、三・四世代家族が多く、しかも主な養育者は祖母であることが多い。②すでにこれまでの調査から、主な養育者が母親であるか祖母であるかによって児童の生活構造が著しく異なっていることが判明したが、居住地域の要因においては、3ヵ町村とも中心部・周辺部という地域差の要因よりも、母親の就労時間の長さや労働の過重が児童の生活の実態に大きな影響を及ぼしていることが再確認された。